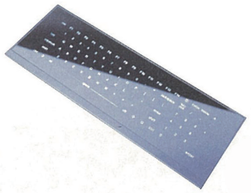
川崎 和男

かわさき かずお／1949年福井市生まれ。デザインディレクター、博士（医学）。大阪大学大学院教授、名古屋市立大学大学院名誉教授、多摩美術大学客員教授、金沢工業大学客員教授。デザインディレクターとして、伝統工芸品からメガネやコンピュータ、ロボット、原子力エネルギー、人工臓器、先端医療、海事戦略、宇宙空間の装置化などまで幅広く、研究、教育、実務活動を行なう。国内外での受賞歴多数。主要国内外美術館に永久収蔵、永久展示多数。
http://www.kazuokawasaki.jp/



「ミネベア株式会社」では完全フラットキーボードをデザイン、「日本精密測器株式会社」のデジタル血圧計をプロデュース、「有限会社福泉窯」では有田焼コーヒーカップをデザインしている。表紙の写真はサラ・ベイリン氏がかけていた「増永眼鏡株式会社」のメガネ

リーダー役を担うために注ぐ厳しき愛情

「これからの日本は、尊敬されるものづくりをめざしていかなくてはいけません」。ものづくり大国・日本の「これから」について語るとき、川崎和男氏の言葉には自然と力がこもる。海外に対する競争力の低下に危機感を持っているが、デザインの力こそが日本のモノづくり産業にとって躍進の鍵となる、と強い信念を持つ。

川崎氏が問題の一つとして言及するのが産学の連携だ。大学院で人材の育成にも力を注いでいるが、国内のある大手メーカーがインダストリアルデザイナーを1名しか採用しないと聞いたとき、強い憤りと無念さを感じたという。講演依頼などで海外に足を運ぶ機会もあり、産業界を含めた日本の実情について、「日本のデザイン教育は遅れてしまった」と指摘する。

また、公共施設に関わる場面では、まちづくり全体のデザイン提案にまで求められるようになるなど、デザイナーに求められる役割も変化しているという。「モノの形だけをデザインするのではなく、『制度設計』の役割が重要になっていきます。例えば、3・11以後に新しい発電方式を考えるなど、システムづくりに関われるデザイナーが一番、求められています。デッサンが描けるだけの人材はいらなくなっていますよ」。

数多くのデザイン賞受賞歴を持つが、今では審査委員としての肩書を数多く持つようになり、次の世代の人材や業界を考える立場に変わった。「25万人を動員した日本のモーターショーも、今や上海が新車発表の中心になりつつあります。しかしいろんな業界のホスト国として様々な産業展は日本がやらなければなりません。あらゆる産業の中心が日本であることをアピールすることにつながるのですから」。これまでも医療関係のデザインを数多く手掛けてきた経験から、「セーレンは人工血管を製造していますが、例えばステントと呼ばれる医療部材などは、眼鏡企業が手掛けてもいいのでは」と業界の垣根を越えた提案も。

川崎氏の、福井への思い入れは強い。「『ふるさと係数』という数値があるならば、僕は非常に高いと思います。63歳になった今、自分が経験してきたことをできる限り、次世代・ふるさとの若者に残していきたいと思っています」。鯖江市が行なっていたSID（鯖江市立インテリジェントデザイン講座）で厳しく指導を受けた人たちも多いはず。「日本でも、イタリアのMIDO（ミド）展やフランスのSILMO（シルモ）展のような国際見本市を実現しなければなりません。そのためにも、鯖江にはもっとしっかりしてもらわなくては困ります。『メイド・イン・サバエ』を強く訴えていきたいですね」。その厳しさは、言い換えれば福井の人への愛情の裏返し。

また、伝統工芸や地場産業が発達している福井や岐阜こそが、京都や奈良の文化を生み出したと常に主張している。「全国的に見ても福井はモノづくりに恵まれています。本来ならばデザインのリーダー役を担わなければならないのですが、教育県と呼ばれてはいても、デザイナーの育成に関して言えば北陸3県の中では最悪の状況です。北陸人は強い精神力を持っているはずなので、そういう意味ではもっと若者にサブカルチャー的なチャンスを与えるべきです」。

URALA 2012 年 7 月号『 リーダー役を担うために注ぐ厳しき愛情』2012 年 6 月 25 日